

教団類型論・再考—宗教運動の展開過程の分析のために—

報告者 ; 塚田穂高 (東京大学大学院)

司会 ; 大谷栄一氏(南山宗教文化研究所)

はじめに

○新宗教研究の現況

- ・新宗教研究の領域…戦後における我国の宗教社会学を牽引[西山 2005]¹
- ・宗教社会学研究会(宗社研、1975-1990)の存在
- ・「第三世代」(井上順孝・孝本貢・島菌進・西山茂・中牧弘允・對馬路人・渡辺雅子ら)が主体となって編まれた『新宗教事典』[井上ほか編 1990]は、新宗教研究の集大成・我国の宗教社会学史上、最大の成果
- ・宗社研が 1990 年に解散→ポスト宗社研世代に移行するにつれ、研究の志向性は拡散、やや錯綜した研究状況
- ・山中弘・林淳 ; 「必要以上に新しい概念が噴出し、混乱を呈している研究状況」²

分析概念の「共有財産化」が図られなければ、研究領域が「秘教化という不健全な事態」に陥ると警鐘[山中・林 1996 : 67-82]

- ・とりわけオウム真理教事件(1995)以降は、多様な(新)宗教論が発表されたが³、多くの論考は、既に提出された分析概念を参照することなく議論を進めており、協同的継続的な研究の蓄積に繋がらず

○本報告の目的 ; 特に、数多くの概念が提出された「教団類型論」に焦点化

- ・既出類型のレビュー → 問題点の析出
- ・新たな分析概念としての類型を提案 …有効性、今後の検討課題の提示

※従来提出された類型は、何のための類型かという目的意識が稀薄。カタログ的であり、動態論的志向が弱い。
→本稿で提出する類型は、宗教運動の展開過程の分析に適合的な点にその意義がある。

1、新宗教の多様性

- 新宗教…「既存の宗教様式とは相対的に区別された新たな宗教様式の樹立と普及によって、急激な社会変動下の人間と社会の矛盾を解決または補償しようとする、19 世紀半ば以降に世界各地で台頭してきた民衆主体の非制度的な成立宗教」[西山 1995a] →もっとも本稿では日本の事例を対象とする
→近代化の従属変数として通文化的に観察/日本独自の宗教制度を背景に生成した固有の文化現象

○共有部分

- ・「生命主義的救済観」…生命連帯の思想、平等・純粹・無垢な人間観と、根源的生命との調和による苦難の解消、豊穡な人生の実現[対馬ほか 1979]。
- ・「報恩の理論」[ベラー1996(1957)]、「原恩の意識」[見田 1965]、「心の哲学」[安丸 1974]
- ・現世主義・平易主義・信者中心主義、等

⇔

○時代による区分⁴

- ・江戸後期から明治初期に立教・伸長 … 如来教、黒住教、天理教、本門佛立講、金光教、丸山教、蓮門教
- ・明治末期から大正期に立教・伸長 … 大本、太靈道、ほんみち、天津教、仏教感化救済会(法音寺)
- ・大正末期から昭和初期に立教・伸長 … ひとのみち(PL教団)、解脱会、念法眞教、靈友会、生長の家、

※本報告の内容は、寺田喜朗氏(東洋大学東洋学研究所客員研究員)との共著論文「教団類型論・再考—新宗教運動の類型論と運動論の架橋のための一試論—」(『白山人類学』第 10 号、2007 年)にその多くを拠っている。共著でありながら、本研究会において個人報告を快く認めて頂いた寺田氏に感謝申し上げたい。

¹ 他に、日本における宗教社会学の研究史的にまとめたものとして、[寺田 2000]・[大谷 2005]などがある。

² 例えば、「習合宗教 syncretic cults」と「ネオ・シンクレチズム」、「宗教浮動人口」と「宗教的無党派層」、「多国籍宗教」と「エピデミック宗教」、「新霊性運動」と「スピリチュアリティ」などなど、ターム間にどのような関係があるのか、指示される実態の間の異同はどのようになっていくのか、新しい概念を創出する必要性はどこに求められるのか、これらの基本的な関心に明確な回答を示さないまま議論が提出されているケースが少なくないように思われる。

³ 必ずしも宗教社会学・新宗教研究の領域から提出されたものではないが、オウム真理教事件を扱い、広く読まれたものとして、[宮台 1995]・[中沢編 1995]・[呉ほか 1996]・[大澤 1996]等の論考が挙げられる。

⁴ 本報告では、当該時期に「立教・伸長」と表現した。既存の宗教伝統との連続性などの点から、立教だけを指標として用いるのは適切でないと思うからである。ここで指摘したいのは、時代ごとの大まかな区分が可能だということである。

世界救世教、修養団捧誠会、円応教、ほんぶしん、大和教団

- ・終戦から高度経済成長期に立教・伸長 … 璽宇、天照皇大神宮教、辯天宗、立正佼成会、創価学会、佛所護念会、妙智會、靈法会、善隣教、中山身語正宗、新生佛教教団、白光真宏会
- ・ポスト高度経済成長期に立教・伸長 … 真如苑、靈波之光、大山祇命神示教会⁵、世界真光文明教団、崇教真光、GLA、阿含宗、顕正会、オウム真理教、幸福の科学、ワールドメイト、法の華三法行

○先行して成立していた宗教の影響 [井上ほか 1990]

- ・近世以前に成立していた宗教伝統の影響
 - ex. 本門佛立講(日蓮系の在家講)、靈友会(法華系の民間行者)、念法眞教・解脱会(密教系宗派と民間行者)、黒住・天理・金光・丸山(民俗宗教あるいは習合神道の伝統を止揚)
- ・先行する新宗教から直接・間接的に分派・分立
 - ex. ほんみち(天理教)、大本(金光教)、生長の家・世界救世教(大本)、立正佼成会・妙智會・佛所護念会(靈友会)、世界真光文明教団・崇教真光(世界救世教)、幸福の科学(GLA)、オウム真理教(阿含宗)、白光真宏会(世界救世教と生長の家)、ワールドメイト(世界救世教・大本・世界紅卍字会)
- ・修養道徳運動(石門心学、報徳社)における通俗道徳、本田親徳の靈学、大石凝真素美の言靈学、西田無学の先祖供養法、記紀神話、教育勅語、ニューソート、スピリチュアリズム、偽史偽典(竹内文書、ノストラダムスの大予言)、セム系一神教的な終末論 [対馬ほか 1990]。

※多層的な系譜を引き、複雑な組成 → 一枚岩にとらえられない研究関心領域が当然出てくる

2、新宗教の教団類型論

○組織形態

- ・井門富二夫[井門 1974]；「文化宗教」・「制度宗教」・「組織宗教」・「個人宗教」
- ・森岡清美[森岡 1981]；土着の宗教組織の類型論；「いえモデル」・「おやこモデル」・「なかま-官僚制連結モデル」+島蘭進[島蘭 1996]；「業務遂行組織-消費者接合モデル」
- ・対馬路人[対馬 2002]；カリスマ的権威の分布パターン；「T(top)構造」・「L(line)構造」・「R(rank)構造」教団

○宗教様式の成立の仕方

- ・西山茂[西山 1988a]；「創唱型」・「混成型」・「再生型」
- ・島蘭進[島蘭 1992a]；「土着創唱型」・「知的思想型」・「修養道徳型」・「中間型」
- ・竹沢尚一郎[竹沢 1995]；「伝統再解釈型」・「呪術—操作型」・「生き神型」

○布教の武器・強調点

- ・西山茂[西山 1988b]；「術の宗教」／「信の宗教」⁶
 - 「術の宗教(〈靈=術〉系新宗教)」
 - …「新新宗教」と大正期に台頭した「操靈によって神靈的な世界と直接的に交流することを重視する」新宗教
 - ex. 大本・太靈道・阿含宗・真光系教団・GLA系教団
 - 「信の宗教」…「教義信条に重点を置いた」新宗教 ex. 天理教・金光教・創価学会・立正佼成会
- ・島蘭進[島蘭 1992b；2001]；「信仰共同体の緊密さの度合い」；「隔離型」・「個人参加型」・「中間型」
- ・西山茂[西山 1990b]；既成教団との関係；「借傘型」・「内棲型」・「提携型」・「自立型」⁷

○その他⁸

- ・芳賀学[芳賀 1994]；「根本主義的セクト」・「呪術的カルト」・「神秘主義的ネットワーク」

⁵ 「大山ねずの命神示教会」の「ねずの」は異体字(祇一)であるため、本報告では便宜的に「祇」を用いる。

⁶ 西山茂は、「術の宗教」並びに下位概念としての「新新宗教」を「時代社会論」だと述べている[西山 1997]。また、西山は、靈術系新宗教の型として、教祖の靈言に基づく教えを信ずる「信奉型」、特定の有資格者が靈術を施す「仲介型」、靈術が一般信者に解放された「互修型」、信者の因縁を教祖が一手に引き受ける「代行型」を指摘している[西山 1991]。

⁷ 西山茂は「宗教的基盤」に着目した類型論として「家祭祀団」・「家信徒団」・「家族祭祀団」・「家族信徒団」という4類型も提出している[西山 1975a]。後二者は仏教系新宗教を分析するために用意された。仏教系新宗教に関しては、世俗社会との調和・和合を重んじる「H(harmony)型教団」と、悪や困難からの勝利を強調する「V(victory)型教団」、「BYの在家主義」・「FORの在家主義」という類型論も提出されている[西山編 2005]。なお、近年、西山は仏教系新宗教という語をほとんど用いず「在家仏教運動」という語を用いている。これらについては、[西山 1995c]にまとめた記述がある。

⁸ 宮台真司は、宗教全般を「行為系宗教」・「体験系宗教」に二分し、体験系宗教を「修養系」と「覚悟系」に二分している[宮台 1995: 29]。この類型は、島蘭進の体験主義の類型(「学習的体験主義」・「享受的体験主義」と似通っている[島蘭 1988]。

- ・中牧弘允[中牧 1989]；「土着的宗教」・「普遍主義的宗教」・「土着主義的宗教」
[中牧 1993]；「エンデミック宗教」・「エピソード宗教」
- ・井上順孝[井上 1999；2002]；「ハイパー宗教」

※西山の「信の宗教」「術の宗教」という類型が最も包括的な議論。

→だが、「時代社会論」であり、運動の発達段階による変遷の側面は視野に入れていない。

また、「いえ - おやこモデル」「なかま - 官僚制モデル」という連結形態は、一つの教団内で併用されているケースがあり、運動展開をも視野に入れた教団類型論としては一面的であり、課題が残る。

3、新宗教をめぐる宗教運動論

○3 つの議論

- ・森岡清美の教団ライフサイクル論[森岡 1989]
；D.O.モバークの、①萌芽的組織(incipient organization)、②公式的組織(formal organization)、③最大効率(maximum efficiency)、④制度的(institutional)段階、⑤解体(disintegration)の5段階説を援用
→立正佼成会の運動展開の分析
- ・西山茂の教団ライフコース論[西山 1990a]
；教団ライフサイクル論の分析可能な対象が「順調に大教団にまで発展した新宗教に限られる」ことを批判し、「教団自身の発達の出来事と、それを取り巻く全体社会の歴史的出来事をふたつながらに」捉え、「多様性をふまえた上での斉一性」を追求するアプローチ、運動展開を取り巻く全体社会の影響を重視
→創価学会を対象にした事例分析⁹
- ・対馬路人の「集団アイデンティティの成熟過程」をめぐる議論[対馬 1987]
；①流行神的段階、②講的組織段階、③教団としてのアイデンティティの確立段階
→大本をはじめとした習合神道系の新宗教や天理教などを念頭において析出

○共通点と相違点

- ・共通点；組織化以前の教団アイデンティティが未成熟な段階から出発し、次第に教義・教則、儀礼・実践、集会・行事を整え、教団施設や聖典・聖地の開発を進め、組織化・制度化が進む。発達段階に応じて運動目標や組織編成、参集する信者群の剥奪特性が異なる。

- ・相違点；両者の想定する発達過程。

教団ライフサイクル/コース論；

萌芽的段階は、「既存の宗教団体への不満ゆえに生じた社会不安の段階」と定置され、「カリスマ的権威主義的予言者のリーダー」がこの段階を特色づけ、「高度の集合沸騰」が見られる。

成熟過程論；

流行神的段階は、「霊能者の呪術的カリスマを中心に、現世利益を求める人びとが未組織に参集している状態」と定置され、「卓越した呪術的カリスマ」の行使によって霊能者と人々の間には「個別的で機能的で一時的な、いわば治療専門家と顧客(依頼者)の関係」が形成され、「集団としての明確な境界も欠いた浮動的な群衆の集合体」がこの段階の特徴。

→このような理論間の齟齬と矛盾の補正・説明を可能にし、II章とIII章(教団類型論と宗教運動論)を架橋するために、以下、まず筆者らなりの宗教運動の類型論を展開してみたい。

※多層的な系譜を引き、複雑な組成をなす新宗教運動の展開過程を単一のモデルで説明することは困難。

※どのような特性を備えた運動(教団類型論)が、どのような課題を抱え、どのような展開過程を取りうるのか(宗教運動論)についての研究蓄積が希薄。

※報告者自身の研究進展過程において問題が浮上

⁹ 西山茂は、[西山 1975b；1986；1998；2004]という4つの論考で創価学会の運動動態を分析しているが、ライフコース論を明示的に展開しているのは[西山 1998]のみであり、そこでも独自の段階指標を提出しているわけではない。なお、教団ライフサイクル論と教団ライフコース論は、相反する理論的前提から析出されているため、理論的には統合することは難しいと考えられる。ここでは、互いに新宗教の運動動態に視点を置き、ライフコース論がライフサイクル論の段階指標を参照していることから、理論の妥当性の検討は括弧に入れ、便宜的に「教団ライフサイクル/コース論」と呼んでいる。なお、これらの宗教運動論の研究史を的確にまとめたものとして、[大谷 1996]を参照のこと。

4、新たな類型の提示とその特徴

○「宗教的権威と救済の源泉の存在形態」を指標にした類型

…権威と救済の源泉のあり方が、当該運動の展開面における発達課題を規定する最重要要因であると思われるため

テキスト教団	……伝統テキスト型	
	……習合テキスト型	
霊能教団	……信徒分有型	…階梯型・開放型
	……指導者集中型	…隔絶型・継承型

- ・「テキスト教団」…宗教的権威の源泉を特定のテキストの無謬性と絶対的な威力に置く
→真理の顕現としての文字化された教えに特殊な威力を認めるとともに絶対的な価値を置き、運動の創始者を神格化せずにテキストの提示者・解説者として位置づける。創始者は、普遍的・超越的真理を人々に媒介する存在として権威を有し、預言者的リーダーとして運動を牽引。
- ・「霊能教団」…宗教的権威の源泉を特定の人物の超常的な能力¹⁰に置く¹¹
※ただし、宗教的権威の源泉は、運動の展開過程で比重に変化が見られたり交錯したりするので、相対的な傾向性を示す類型区分として想定しており、概念的には純粋な理念型 (Idealtypus) として規定している。

○テキスト教団の下位類型

- ・「伝統テキスト型」…題目や法華経あるいは日蓮の遺文等の、伝統的な既存のテキストを信奉
ex. 本門佛立講系の諸教団、真実顕現以降の立正佼成会、創価学会、顕正会
- ・「習合テキスト型」…『甘露の法雨』等の、諸宗教伝統・思想を独自に取り込んだテキストを信奉¹²
ex. 生長の家、(幸福の科学)

○霊能教団の下位類型

- ・「信徒分有型」…超常的な能力の保有・開発が参画者に開かれていることを説く。
ex. 真光系諸教団、鎮魂帰神法を称揚していた頃の大本、世界救世教やその分派
→「階梯型」…教団が指定する特定の修行の階梯を辿ることによって霊能ないし非日常的な能力が段階的に備わることを説く。 ex. 真如苑・円応教・大和教団
「開放型」…霊能の保有・開発が教団への入信と共に即時的、あるいは相対的に短期間で可能になると説く(もちろん階梯・差異の面もある。相対的なもの)。
ex. 真光系諸教団・解脱会・(「さづけ」開発以降の) 天理教
- ・「指導者集中型」…超常的な能力の存在が特定の指導者に専有されていると説く教団である。
ex. ほんみち・天照皇大神宮教・霊波之光
→「隔絶型」…超常的な能力の保有が教祖に限定されていることを説く
ex. ほんみちの大西愛治郎、黒住教の黒住宗忠、丸山教の伊藤六郎兵衛、天照皇大神宮教の北村サヨ、霊波之光の波瀬善雄、新生佛教教団の秋本日積
「継承型」¹³…超常的な能力が教祖から後継指導者に継承されることを説く(初代教祖と全く同じ能力をそのまま継承することができるか否かは差異あり)。
ex. 金光教・PL教団・白光真宏会

・西山の「信の宗教」「術の宗教」に立脚しつつも、特定の時代の動向を把握するためではなく(脱「時代社会論」化し)、下

¹⁰ 霊能という語には、憑霊・操霊・脱魂・審神などの能力に加えて、いわゆる超能力や俗に不思議な力と称される力能の意味を含め用いたい。

¹¹ この2類型は、それぞれ「文書カリスマ」、「人物カリスマ」(報告者らの造語)ということもできる。ヴェーバーは、「カリスマとは、非日常的なものとなされたある人物の資質を言う。この資質の故に、彼は、超自然的または超人間的または少なくとも特殊非日常的な、誰もが持ちうるとは言えないような力や性質に恵まれていると評価され、あるいは神から遣わされたものとして、あるいは模範として、またそれ故に指導者として評価されることになる」と、ある人物が所有していると帰依者によって見なされる特殊な資質として説明している。しかし、一方、「生来それを所有している物ないし人に宿る一つの賜物」とも述べており、マナ mana 概念をも包摂する非日常的・超自然的・非人間的な力ないし性質とも捉えている。上の引用は、[ヴェーバー 1970(1921-22): 70]、下の引用は、[ヴェーバー 1976(1921-22): 4] から。なお、以上の解釈については、[ヴェーバー 1976(1921-22): 339] の訳注を参照した。本報告では、ほぼ意図的に、「カリスマ」概念には触れていない。カリスマ概念について詳細に論じる紙幅と十分な準備がないことに加えて、主眼がおかれていないこと、その状態で論じては議論に混乱が生じるだろうこと、などがその理由である。

¹² 習合テキスト教団は、井上順孝のタムで言えば「ハイパー宗教」[井上 1999: 198-217]になろう。

¹³ 島菌は、日本の新宗教の教祖崇拜の型として、「神的なものを、今、現に地上で代表しているというだけでなく、人類史の決定的な転換をもたらした唯一至高の存在であると信じられてきた…(略)…本来の意味での(典型的な)教祖崇拜」と、「根源的な何かを体現しつつも、その時代の時の推移の中で人々を導いて行く指導者への崇拜」としての「歴代教祖」的(歴代教主崇拜的、会長崇拜的)な指導者崇拜を指摘している。これは、本論の隔絶型と継承型に対応する[島菌 1991]。

位類型を細分化した上で、運動展開の分析に戦略性を持たせた点に独自性がある¹⁴。

※宗教運動論との接合・組織構造の静的分析を行うのみに留まらず、動的な分析へ議論を架橋させること

→前述の教団ライフサイクル/コース論と成熟過程論の齟齬は、宗教的権威の源泉の差異——教団の中核的な救済財の相違から派生。テキスト教団と霊能教団とは、本来的な布教の武器、運動の求心力が事なり、運動初期段階においても集団の組成メカニズムや信者の動員プロセスが異なる。

5、各類型において想定される課題群

○各類型が運動展開過程において直面することが想定される課題群

・テキスト教団の場合…

テキストは不変、普遍的な価値が想定。宗教的権威の源泉にライフサイクルは認められない。よって、教学の整備により、権威を安定させ、世代を超えた宗教的価値の伝達が可能。

⇨テキストの権威の強調と肥大化を誘引し、運動の生命力が掘り崩され、形式主義、教条主義に陥りがち。人々の現世利益のニーズとの乖離が生じやすく、呪術・神秘性の保持と証しの面における適応課題が発生。

⇨テキストの解釈の正当性をめぐって、分派・分立の危険性を内包

→伝統テキスト型…ファンダメンタリスティックな教義解釈と現実主義との間の相剋¹⁵

→習合テキスト型…テキストの構造的多面性が解釈の多様性を生み、類似派生集団を誘発しがち¹⁶

・霊能の指導者集中型教団の場合…

霊能の発現者のライフは有限。霊能の効験にも教団の規模に応じてスケールの変化。儀礼・崇拜対象・教典等への「カリスマの分散的転封」¹⁷が要請。模範的人間像、神と人との仲介者、神から遣わされた者、神そのもの、等と教祖の意味づけを巡って様々な定式化・神話化が図られる(特に隔絶型において)¹⁸。

⇨大教団化・広域組織化が進展するに伴い、物理的に直接的な霊能の行使は困難になる。その際、霊能は、「直接行使」から「間接行使」へ移行。霊能者の死や代替わりによって霊能の発現、カリスマの証明が大きく問題化¹⁹。さらに、安定した継承を志向して、後継者の養成の必要性も焦点化される。継承後も常に初代教祖と霊能が比較され、運動展開に影響を与えるのもこの類型の特徴(特に継承型)²⁰。

・霊能の信徒分有型教団の場合…

大教団化・広域組織化に際しても、あるいは指導者の代替わりに際しても、直接的な霊能の行使が可能であるという利点。誰もが霊能を保有するという事は、成員のコミットメントの動機付け。

⇨組織の統制の問題。安易な霊能の開放は、宗教的権威の一元的構造をつき崩し、運動全体の統合を脅かす可能性。特に階梯型よりも開放型の方が、霊能保持者の台頭や独自の解釈と活動を生じさせやすい。一方で、階梯型は、ヒエラルキー構造ゆえに、有力幹部に率いられた教会ごと・支部ごとの離脱を生みやすい²¹。

※個別事例研究に方向性・位置づけを与える。

6、類型間移行のパターン

¹⁴ ここで既出の概念との対応関係を整理しておこう。テキスト教団の伝統テキスト型は、西山の再生型、竹沢の伝統再解釈型の一部に対応し、習合テキスト型は西山の混成型に対応する。ただし、混成型のうち、生長の家と真如苑・阿含宗・オウム真理教の間には区分が設けられる。島菌の知的思想型は、テキスト教団全体に対応する。霊能教団は、西山の霊術系、あるいは創唱型と一部の混成型に対応する。島菌の議論との関係では、土着創唱型、あるいはそれと関係する中間型に対応する。竹沢の呪術-操作型は、信徒分有型に、生き神型は指導者集中型に対応する。なお霊能教団の二分類に関しては、対馬の類型論が報告者らのアイデアと近く、T構造が指導者集中型、L構造とR構造の多くが信徒分有型に対応する。

¹⁵ この問題を扱った論考には、[西山 1978]・[大谷・小島 2005]がある。

¹⁶ 例えば、生長の家の影響が、白光真会・幸福の科学・法の華三法行・いじゅん(龍泉)等の教団に見られることは広く知られているが、善隣教・霊波之光等においても影響を看取できる。習合テキスト型の場合、直接的な分派以上に間接的な影響を広範囲に与える可能性がある。

¹⁷ 「カリスマの転封」という概念は、[西山 1990a : 55-62]を参照のこと。なお、これに巧く適応できなかった事例は[孝本 1980]、成功事例は[渡辺 1987]を参照のこと。

¹⁸ これを島菌進は「至高者神話」の成立過程として論じている[島菌 1982]。その他この問題については、[島菌 1978]・[渡辺 1980 ; 1987]等の議論を参照のこと。

¹⁹ なお、この問題は、「カリスマの日常化」の議論と密接に関係する。だが、ヴェーバーは、必ずしも宗教的指導者のみをカリスマに想定していたわけではなく、その議論も多種多様なパターンをパノラマ的に羅列しているのみで、首尾一貫した理論を形成させているわけではない。ヴェーバーは、後継者の規則的選定問題(「資格」への転化問題=官職カリスマへの転化)、正当性の確立問題(真正カリスマの恒常的承認の困難性=世襲カリスマへの転化)、合理的な規律による変質問題(官僚制とのせめぎ合い)、等といった論点を摘出しているが、例えば、カリスマ的指導者の死、という局面に議論を特化した場合、ここに対応する周到な議論を用意しているわけではない[ヴェーバー 1962(1921-22) : 398-523]。

²⁰ 指導者集中型教団の課題解決を扱った事例研究としては[塚田 2006 ; 2007]を参照のこと。

²¹ 信徒分有型教団の分派を扱った事例研究としては[弓山 2005]を参照のこと。

○「宗教的権威と救済の源泉の存在形態」とは、発生要件や既成教団との関係によって固定的に決まるものではない。よって、当該運動が他の救済財を資源としている場合や他の存在形態が可能な場合、運動展開に伴って、その強調点が移行することも見られる。これらは前傾の類型間の移行として把握できる。

・信徒分有型 → 指導者集中型

運動展開にともない、霊能に統制が加えられ一元化されてゆく状況。分派・分立を避ける効用。運動展開の初期においては、教祖のみでなくその限られた弟子などにも救済の方途としての霊能が認められていることがしばしば。

ex. 大山祇命神示教会[神奈川新聞社1986]、霊波之光、阿含宗

・指導者集中型 → 信徒分有型

大教団化・広域組織化にともなう呪術的要素の見直し、または、直接的な霊能の行使が不可能になったことによるカリスマの下級委譲の状況。

ex. 白光真宏会[名佐原2004]、天理教・昭和期以降の天理教系教団の分派[島藪1978；弓山2005]。

・霊能型 → テキスト型

運動展開にともなう「脱呪術化」・「合理化」の流れ。発生当初は、呪術的な病気治しなどを布教の主要な武器としていても、大教団化する過程で、社会からの批判や信者階層の上昇等の影響を受けて移行。世代を超えて伝達可能なテキストへのカリスマの転封。ただし、拠って立つことができるだけの伝統性や内実を備えたテキスト、並びに解釈者(教学整備者)を、当該運動が資源として内包しているかが重要な鍵。

ex. 立正佼成会の「読売事件」以後の「真実顕現」[森岡1989]

・テキスト型 → 霊能型

ほぼ見られない例。特に完全な移行の例は、まず見出せない。ただし、霊能からの「脱呪術化」の徹底をはかりすぎた反動として、運動内で再呪術化の方向を希求するケース。

ex. (キリスト教のペンテコステ運動)、天理教の教勢倍加運動、辯天宗の救済論の比重[弓山1994]

おわりに

・「新新宗教」を含む多くの新宗教運動が、既に指導者や信者の世代交代を経験し後継者の時代を迎えている状況

・「発生論」から「変容／継承論」へ 実証的事例研究の蓄積 → 新宗教研究の精緻化、豊饒化に

・分析概念と検討すべき命題を共有

→ 日本の新宗教運動の事例研究から析出された知見でありながら、広く宗教運動一般を分析できる視点や概念となる可能性。

論点

○「何のための類型か」——社会学に向けて

- ・単なる事典的記述、あるいは総論的記述のためのみの類型では、不十分。×袋小路としての教団類型論
- ・あるいは、一事例研究のためだけの、即席的類型にも疑問。
- ・構造的把握 ⇔ 個別事例研究 の往還 事例媒介的なアプローチ
[寺田・塚田 2007]⇔[塚田 2006 ; 2007] [西山 1990b]⇔[大谷・小島 2005]

○なぜ今、教団類型論か

[寺田 2000] ; 第4期 内在的理解と教団類型論による新宗教へのまなざし(1975-1990)
後者 ; 西山の「内棲宗教」・「霊術系宗教論」
第5期 構築主義による宗教現象の構築過程へのまなざし(1990-2000)
区分根拠 ; 「構築主義的アプローチの導入」

[張江 2001] ;

- ・「かれらの「現在」を形成しているのは、第4期がつくりだした理論的地平そのものではなく、それが十分に歩まれていないことへの認識、つまり〈不満〉の集積なのである。」
「おそらく、「転換期」と呼べるべき第5期とは、第4期の理論地平をさらに徹底して歩みきるなかにおいて、はじめて現出するようにおもわれる。」
- ・「行為者の意味付与・解釈と相互行為の過程の中で間主観的な現象として社会・教団が構築されている」という視座は、とりもなおさず「状態」ではなく「活動」を焦点化するものである。
「いい換えれば、教団という「状態」が想定されている限りにおいて、この指摘は妥当する。」
「寺田論文が語る「構築主義的アプローチ」とは、教団、つまり、客観的に想定可能な〈宗教〉がすでにつねに暗黙に想定される場合にのみ妥当するのではあるまいか。」
→4期の理論地平を徹底して歩みきり、「独自の教団類型論」の提出により、「状態」(存在論的な準位)の検討

参考文献

- 井門富二夫 1974 「宗教と社会変動—世俗化の意味を求めて—」『思想』603 45-71
井上順孝 1999 『若者と現代宗教—失われた座標軸—』ちくま新書
井上順孝 2002 『宗教社会学のすすめ』丸善ライブラリー
井上順孝・孝本貢・対馬路人・中牧弘允・西山茂編 1990 『新宗教事典』弘文堂
井上順孝・西山茂・島蘭進・弓山達也・対馬路人・津城寛文・梅津礼司・沼田健哉 1990 「分派と影響関係」
井上他編 『新宗教事典』弘文堂 64-100
ウェーバー、M. 1962(1921—1922) 『支配の社会学Ⅱ』(世良晃志郎訳)創文社
ウェーバー、M. 1970(1921—1922) 『支配の諸類型』(世良晃志郎訳)創文社
ウェーバー、M. 1976(1921—1922) 『宗教社会学』(武藤一雄・島田宗人・島田坦訳)創文社
大澤真幸 1996 『虚構の時代の果て—オウムと世界最終戦争—』ちくま新書
大谷栄一 1996 「宗教運動論の再検討—宗教運動の構築主義的アプローチの展開にむけて—」『現代社会理論研究』6 193-204
大谷栄一 2005 「宗教社会学者は現代社会をどのように分析するのか?—社会学における宗教研究の歴史と現状—」
社会科学基礎論研究会編 『年報 社会科学基礎論研究 第4号 現代社会と〈宗教〉の鏡』ハーベスト社 76-93
大谷栄一・小島伸之 2005 「戦前期における純粋在家主義運動の運動過程—本法会・浄風教会・浄風寺・浄風会の事例—」
東洋大学西山ゼミ浄風会調査プロジェクト編 『純粋在家主義運動の展開と変容—本法会・浄風教会の軌跡—』
東洋大学社会学部西山研究室 443
神奈川新聞社編著 1986 『神は降りた—奇跡の新宗教大山祇命神社教会—』学習研究社
呉智英・橋爪大三郎・大月隆寛・三島浩司 1996 『オウムと近代国家—市民はオウムを許容するか—』南風社
孝本貢 1980 「カリスマの死—真理実行会の事例—」『明治大学教養論集』139 1-20
島蘭進 1978 「生神思想論—新宗教における民俗〈宗教〉の止揚について—」宗教社会学研究会編 『現代宗教への視角』雄山閣 38-50
島蘭進 1982 「カリスマの変容と至高者神話—初期新宗教の発生過程を手がかりとして—」
中牧弘允編 『神々の相克—文化接触と土着主義—』新泉社 51-77
島蘭進 1988 「新宗教の体験主義—初期霊友会の場合—」村上重良編 『大系 仏教と日本人 10 民衆と社会』春秋社 277-326
島蘭進 1991 「新宗教の教祖崇拜の変容」小田晋編 『現代のエスプリ』292 53-63
島蘭進 1992a 「新宗教の諸類型」『現代救済宗教論』青弓社 62-80

- 島藺進 1992b 「新宗教と新霊性運動」『現代救済宗教論』青弓社 221-250
- 島藺進 1996 「聖の商業化—宗教的奉仕と贈与の変容—」島藺進・石井研二編『消費される〈宗教〉』春秋社 88-110
- 島藺進 2001 「『旧』新宗教と新新宗教」『ポストモダンの新宗教—現代日本の精神状況の底流—』東京堂出版 22-37
- 竹沢尚一郎 1995 「共同体の形成とカリスマの継承—天照皇大神宮教—」
- 坂井信生編『西日本の新宗教運動の比較研究』九州大学文学部宗教学研究室 5-34
- 塚田徳高 2006 「霊能の「指導者集中型」宗教運動の展開過程における発達課題—日本の新宗教・霊波之光の事例から—」
『東京大学宗教学年報』24 110-127
- 塚田徳高 2007 「新宗教運動における指導者の後継者への継承過程—霊波之光の事例から—」『次世代人文社会研究』3 307-322
- 対馬路人 1987 「信念をともにする集団」佐々木薫・永田良昭編『集団行動の心理学』有斐閣 273-299
- 対馬路人 2002 「宗教組織におけるカリスマの制度化と宗教運動—日本の新宗教を中心に—」
- 宗教社会学の会編『新世紀の宗教—「聖なるもの」の現代的諸相』創元社 246-275
- 対馬路人・西山茂・島藺進・白水寛子 1979 「新宗教における生命主義的救済観」『思想』665 92-115
- 対馬路人・島藺進・藤井健志・井上順孝 1990 「教え」井上順孝他編『新宗教事典』弘文堂 212-252
- 寺田喜朗 2000 「20世紀における日本の宗教社会学—アプローチの変遷についての鳥瞰図—」
- 大谷栄一・川又俊則・菊池裕生編『構築される信念—宗教社会学のアクチュアリティを求めて—』ハーベスト社 157-175
- 寺田喜朗・塚田徳高 2007 「教団類型論—再考—新宗教運動の類型論と運動論の架橋のための一試論—」『白山人類学』10 1-20
- 中沢新一責任編集 1995 『オウム真理教の深層 (imago 8月臨時増刊号)』青土社
- 中牧弘允 1989 『日本宗教と日系新宗教の研究—日本・アメリカ・ブラジル—』刀水書房
- 中牧弘允 1993 「エンデミック宗教とエビデミック宗教の共生—ブラジルの生長の家の事例から—」『宗教研究』296 131-154
- 名佐原大輔 2004 「白光真宏会における教えと実践の変容—教祖・五井昌久の時代から後継者・西園寺昌美の時代へ—」
- 東京学芸大学教育学部 (国際文化教育課程日本研究専攻) 提出の卒業論文 (未公開)
- 西山茂 1975a 「我国における家庭内宗教集団の類型とその変化」『東洋大学社会学研究所年報』VIII 67-88
- 西山茂 1975b 「日蓮正宗創価学会における「本門戒壇」論の変遷—政治的宗教運動と社会統制—」中尾堯編『日蓮宗の諸問題』雄山閣 241-275
- 西山茂 1978 「一少数派講中の分派過程—日蓮正宗妙信講の事例—」宗教社会学研究会編『現代宗教への視角』雄山閣 112-128
- 西山茂 1986 「正当化の危機と教学革新—「正本堂」完成以後の石山教学の場合—」
- 森岡清美編『近現代における「家」の変質と宗教』新地書房 263-299
- 西山茂 1988a 「新宗教と新新宗教」瞑想情報センター編『瞑想と精神世界事典』自由国民社 55-62
- 西山茂 1988b 「現代の宗教運動—〈霊—術〉系新宗教の流行と「2つの近代化」—」大村英昭・西山茂編『現代人の宗教』有斐閣 169-210
- 西山茂 1990a 「運動展開のパターン」井上順孝他編『新宗教事典』弘文堂 55-62
- 西山茂 1990b 「組織の多様性」井上順孝他編『新宗教事典』弘文堂 132-137
- 西山茂 1991 「霊術系新宗教の現在と将来」『G—TEN』59 38-46
- 西山茂 1995a 「新宗教の特徴と類型」山下袈裟男編『日本社会論の再検討—到達点と課題—』未来社 147-168
- 西山茂 1995b 「在家仏教運動における伝統と革新」『平成六年度東洋大学国内特別研究成果報告書』東洋大学社会学部 1-19
- 西山茂 1997 「「(新新宗教) 概念の学術的有効性について」へのリプライ」『宗教と社会』3 25-29
- 西山茂 1998 「内棲宗教の自立化と宗教様式の革新—戦後第二期の創価学会の場合—」
- 沼義昭博士古稀記念論文集『宗教と社会生活の諸相』隆文館 113-141
- 西山茂 2004 「変貌する創価学会の今昔」『世界』727 170-181
- 西山茂 2005 「日本の新宗教研究と宗教社会学の百年—実証研究の成果と課題を中心に—」『宗教研究』343 195-225
- 芳賀学 1994 「新宗教は何を与えるのか」芳賀学・弓山達也『祈る ふれあう 感じる—自分探しのオデッセ—』IPC 72-112
- 張江洋直 2001 「目的論的な思考が隠蔽するもの—〈構築される信念〉は宗教なのか—」『現代社会理論研究』11 336-343
- ベラー、R.N.1996(1957)『徳川時代の宗教』(池田昭訳)岩波文庫
- 見田宗介 1965 『現代日本の精神構造』弘文堂
- 宮台真司 1995 『終わりなき日常を生きる—オウム完全克服マニュアル—』筑摩書房
- Moberg, D.O. 1962 The Church as a Social Institution: The Sociology of American Religion. Prentice-Hall
- 森岡清美 1981 「宗教組織—現代日本における土着宗教の組織形態—」『組織科学』15-1 19-27
- 森岡清美 1989 『新宗教運動の展開過程—教団ライフサイクル論の視点から—』創文社
- 安丸良夫 1974 『日本の近代化と民衆思想』青木書店
- 山中弘・林淳 1995 「日本における宗教社会学の展開」『愛知学院大学文学部紀要』25 67-82
- 弓山達也 1994 「辯天宗における救済論の展開—特に水子供養に関連させて—」『宗教学年報 (大正大学宗教学会)』24 87-99
- 弓山達也 2005 『天啓のゆくえ—宗派が分派するとき—』日本地域社会研究所
- 渡辺雅子 1980 「救いの論理—天照皇大神宮教の場合—」宗教社会学研究会編『宗教の意味世界』雄山閣 98-116
- 渡辺雅子 1987 「分派教団における教祖の形成過程—妙智會教団の場合—」宗教社会学研究会編『教祖とその周辺』雄山閣 111-134